



〒892-0841
鹿兒島市照国町13-42
カトリック鹿兒島司教区
電話099 (226) 5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行人 末吉卓也
1部60円年間訂共1100円

道標

【司教区昇格五十周年】
小教区が活性化し
教区が一つとなるように

殉教者の信仰を手本に！

川内殉教祭で信徒の生き方を学ぶ

平佐城主北郷加賀守の家臣レオ税所七右衛門敦朝は一六〇八年十一月十七日、信仰を捨てなかつたために斬首刑に処せられた。受洗から四か月足らずの殉教であった。僅かの間に最も強い信仰を世に顕したレオの遺徳を偲び彼の列福を祈願する恒例の川内殉教祭が、十一月二十日(日)午後、川内教会(ジ・ハンマ神父主任司教)であった。各地から集まった二百人余りの信者は、講話でレオが育った時代のカテキズムについて学習し、ミサで彼の生き方を振り返るとともにその列福の早期実現を祈った。

一九八五年から続けられた二十一回目となった同祭で、講演したのは、ジ・ムーベール神父(レデンプートル会・谷山教会主任)。ローマで学び、また日本の教会の歴史に詳しい神父は、レオが生きた時代に使われた要理書やヴァリニャーノ

神父(イエズス会・一五三九〜一六〇六年)に代表される宣教師たちの要理方法について熱心に解説した。ムーベール神父は「ヨーロッパの要理書を日本化するのには大変苦労が必要だったし、間違いも多々あった。しかしその要理の中には現代でも大切にされるべきものがある」とし、今の子どもたちに神への信仰と信頼、キリストに基づいた愛と希望、ローマを軸とする教会への一致、聖母マリアへの尊敬を伝えて欲しいと信者たちに

メッセージを送った。講演後は糸永司教司式のミサがささげられた。ミサの説教で糸永司教は、レオ七右衛門をはじめとする百八十八人の日本の殉教者の列福申請の現状を報告。その上で「殉教者の生き方こそキリスト者の生き方。



①殉教者の信仰について話す糸永司教
②レオが受洗した京泊教会跡地で祈りをささげる

羅針盤

鹿兒島教区が司教区に昇格する二年前の一九五三年三月、司祭に叙階され同年四月教区長館付きとなった私は、週日のミサは純心聖母会修道院、主日には創立間もない鴨池教会で行うこととなった。鹿兒島の事情も少しは分かりかけた八月、学生時代の病が再発し入院加療を余儀なくされた。「退院は少し早い状態であるが、司祭不足の鹿兒島教区の事情を考えると退院

司教区昇格の頃の鹿兒島

兼水教会主任司教 田原 章

兼司祭の住居で事務室は縁側の一角だった。主日になると間仕切りのふすまを取り外し、八坪の祭儀の場となる名実ともに家庭的教会だった。台風シーズンともなると周囲に巡らしていた古い板塀はひとたまりもなかった。財政的余裕

もなく、飛散した板を拾い集め、古釘を伸ばして再利用の修復作業の繰り返しは大変だった。着任して数か月が過ぎた頃のこと、鹿兒島から二人の高校生が立ち寄った。開聞岳登山と聞かされた賄いさんは、なげなしの米を



ないレデンプートル修道会に委託され、療養中であつた私は、司教館が建築された鴨池教会に転任となった。その頃、初代司教は宣教の拠点として適当な用地の獲得に懸命であつた。教区長館の敷地は借地の上、手狭のため新たに司教館及び教区事務所用地として現在地を購入した。同所にあつた日本家屋がしばらくの間、司教館兼教区事務所となった。鹿兒島市薬師町に教区所有地があり、神学生養成のため宿舎と小聖堂が造られた。その後その地に小教区教会の設立が考えられたが、実現できず売却された。谷山、紫原方面を物色して買収した用地は、現在、紫原教会とカトリック・カリスス幼稚園として活用されている。

「聖体」について学習

教区典礼研修会

十一月二十三日(水)ザビエル教会と教区本部を会場に教区典礼研修会が行われ、約八十人の信徒と司祭、修道者が参加した。今回は中央協議会の典礼委員を務めるフランコ・ソットコロノラ神父(聖ザベリオ宣教会)を招き

しかしこの生き方が危機に貧している」と鹿兒島教区のミサ出席率低迷や司教召命不足の現状を挙げて説明し、「殉教者を顕彰し敬おうとしなければますます危機的状況に陥る。殉教者を見習い信仰の原点に立ち返るように」と信者たちを励ました。ミサの終わりにには全員で「レオ七右衛門の列福を求める祈り」を唱え、その列福の早期実現のために心を合わせた。その後、ミサを終えた信者たちはレオが受洗した京泊教会跡地へ巡礼し、川内河口を見下ろす小高い丘の上で聖歌を歌いロザリオの祈りを唱えて、殉教者に祈りをささげた。

教区人事

- ▼エキユメニズム担当 亡くなった小平卓保神父に代わり桃蘭淳一郎助祭(鴨池)
- ▼青少年担当 F・レナト神父(ザベ)

リオ宣教会・前鹿屋教会助任)が担当していた青年司牧を末吉卓也神父(ザビエル教会助任) 下村徹神父 長期静養中であつたが、十月末をもって長崎大司教区へ籍を移した。

「ノアの洪水」物語②

聖書の間人理解 (9) 竹山 昭

ヤーヴェ伝承による
洪水の終結

水が引いたことを知るためにノアは鳥と鳩を飛ばして確かめた後、神の命令にしたがって箱船を出て、焼き尽くす捧げ物を捧げる。それに応えるように、ヤーヴェは「御心に言われた」。

「人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしはこの度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。地の続くかぎり、種播きも刈り入れも、暑さも寒さも、夏も冬も、昼も夜も、やむことはない」(八・21-22)。

12月

【十字架の使徒会祈りの意向】 小教区の活性化

3日(土) 聖フランシスコ・ザビエル司祭

▼中野裕明神父霊名(聖フランシスコ・ザビエル)

4日(日) 待降節第二日

▼信仰養成委員会・教区本部・14時

▼宣教地司祭育成の日(献金)

日本にはこれまで海外から多くの宣教師が来て、キリスト教の信仰をもたらしてくれました。現在の信徒数に対して司祭の和は確かに多いでしょう。でも、キリストを知らない人の数を考えると、もともと司祭が必要で、(宣教師を含めても、約八万人に一人の割合です)

「宣教地司祭育成の日」は、日本だけでなく世界中の宣教地において司祭の育成が大切なことに気づき、そのために祈り、献金をささげよう呼びかけます。この日の献金はローマ教皇庁に集められて、全世界の宣教地の司祭育成のために援助金として送られます。

8日(木) 無原罪の聖マリア

▼瀬留教会献堂記念日(一九〇八年)

▼川内教会献堂記念日(一九九一年)

▼星塚教会献堂記念日(一九五五年)

11日(日) 待降節第三日

▼大野和夫神父叙階記念日(一九六一年)

▼轟木教会献堂記念日(一九五九年)

24日(土) 降誕祭夜半の司教ミサ・カテドラル・20時

▼国分教会献堂記念日(一九六八年)

25日(日) 主の降誕

▼嘉渡教会献堂記念日(一九〇二年)

26日(月) 聖ステファノ殉教者

▼田辺徹神父、寝占教之神父、末吉卓也神父霊名(聖ヨハネ使徒)

27日(火) 聖ヨハネ使徒福音記者

▼教区本部仕事納め

28日(水) 幼子殉教者

▼聖家族

30日(金) 聖家族

▼フェリエ神父大島来島(一八九一年)

31日(土) フェリエ神父大島来島(一八九一年)

<KABAYAN SEKSIYON>

"Huwag kang sasaksi nang mali laban sa iyong kapwa"

Ang pangwalong utos ng Diyos na tatalakayin natin ay ang "Huwag kang sasaksi nang mali laban sa iyong kapwa". Ipinagbabawal ng kautusan na ito ang hindi tama ng pagpahayag ng katotohanan sa ating kapwa. Ang aral na ito ay umaagos galing sa bokasyon ng mga pinagpalang tao na maging saksi sa kanilang Diyos na Siya ang katotohanan at naisin ang katotohanan. Ang pagkakasala kontra sa katotohanan na nagpapahayag sa salita o gawa ay ang pagtangi na ipasok ang sarili sa aral ng kabutihan: pundasyon ito ng kataksilan sa Diyos at hindi pinahalagahan ang pundasyon ng tipan. Ang Lumang Tipan ay nagpapatunay na ang Diyos ang pinagmumulan ng lahat ng katotohanan. Ang kanyang Salita ay katotohanan. Ang kanyang Batas ay katotohanan. Ang kanyang "katapatan ay magtatagap sa lahat ng salinlahi". Dahil sa ang Diyos ay "totoo", inaanyayahan niya ang lahat na mamuhay sa katotohanan. Ang kabuuan ng Katotohanan ng Diyos ay ipinahayag kay Jesukristo. "Napupuno ng grasya at katotohanan", dumating siya bilang "liwanag ng mundo", siya ang "katotohanan". "Ang nanalig sa akin ay hindi mamalagi sa dilim". (Jn. 12:46). Ang mga alagad ni Jesus ay nagpatuloy sa kanyang salita at para maiintindihan ang katotohanan, at palalayain kayo ng katotohanan at papabalin ng katotohanan. Ang pagsunod kay Jesus ay ang namumuhay sa "Espiritu ng katotohanan", na ipinadala ito sa ngalan ng Ama at para dalhin ang "buong katotohanan". Para sa kanyang mga alagad itinuro ni Jesus ang walang kondisyon na pagmahal sa katotohanan: "Sabihin mong oo kung oo at hindi kung hindi". Tayo rin ay tinuturuan na mamuhay sa katotohanan tulad ng itinuro ni Jesus sa kanyang mga alagad. Dahil ang tao ay hindi pwedeng mamuhay sa kanyang kasama kung walang tiwala sa magkabilang panig na ang bawat isa ay kailangan mamuhay sa katotohanan. Ang kahalagahan ng katotohanan ay nagbibigay sa kapwa ng kanyang karapatan. Ang mga alagad ni Jesus ay pinayagan na "mamuhay sa katotohanan", na ang ibig sabihin payak na mamuhay ay sunod sa halimbawa ng kanilang Panginoon, na mamuhay sa katotohanan. Pagnilaynilayan natin ang ating mga sarili: Ikaw ba'y namumuhay sa katotohanan at nasa saiyo ba ang katotohanan, Kabayan...?

ジュリア「教皇様。わたしたちは喜んでミサに行きます。でも、両親は、日曜日は寝ていたいからといって、ほとんどの場合、いっしょにミサに行ってくれません。また、うちの家族は、よく日曜日に、いなかのおじいちゃん・おばあちゃんの家に行きます。両親に一言いっていただけないでしょうか。日曜日にいっしょにミサに行くのが大切だということをお話だけできないでしょうか」。

教皇さまへの

子供たちの質問

「これは、わたしにとつてのみ大切なことではありません。また、これは、カテキスタだけが知っていることでもありません。ミサは、わたしたち皆にとつて大切なことです。ミサは、日曜日の光として、わたしたち家族全員を照らしてくれるのです。」(カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究会 画訳を一部省略)

「レビ七・26以下)。さらに「あなたたちの血が流された場合」、神は獣からも人間からもその賠償を求める、という。ノアとその息子達がその後の人類の先祖とされている以上、「あなたがたの血」とは、広く「人間の命」と同じ意味になる。

この人命尊重の最終的な理由が「人は神にかたどって造られたからだ」と言われるとき、殺人は神の創造のみ業の否定にほかならないことが示されています。こうして祭司伝承は、人命の尊重こそ人類に与えられた「産めよ、増えよ、地に満ちよ」との祝福が実現するための条件であることと語っているのです。

祭司伝承は、先のヤーヴェ伝承が、神の独り言、ということを示した「二度と洪水で滅ぼさない」との誓いを、伝承の特徴である「契約」という形で伝えて終わっている。その場合、神の「恵み」という特徴は徹底して神の一方的な約束—ノアは何も要求されないし、一言も発しない—という形で表現されている。

祭司伝承の場合も先の二人の研究をもとに見ておこう。神は箱船を出たノアとその息子たちを祝福して言われる。「産めよ、増えよ、地に満ちよ」

さらに、すべての生き物(野の獣、空の鳥、海の魚)は彼らに委ねられ、食料として与えられる(九・1-3)。

祭司伝承の場合も先の二人の研究をもとに見ておこう。神は箱船を出たノアとその息子たちを祝福して言われる。「産めよ、増えよ、地に満ちよ」

さらに、すべての生き物(野の獣、空の鳥、海の魚)は彼らに委ねられ、食料として与えられる(九・1-3)。

祭司伝承の場合も先の二人の研究をもとに見ておこう。神は箱船を出たノアとその息子たちを祝福して言われる。「産めよ、増えよ、地に満ちよ」

終身助祭が やつて来た

種子島教会

十一月十三日(日)種子島教会で信者たちに聖体を授けたのは、この九月、桃園淳一郎師(鴨池教会)とともに教区初の終身助祭に上げられた久保俊弘師(教誨師・谷山教会)。仕事の都合で教会を留守することになったベルナルディーノ神父の代理を果たしたのだ。



この日の「みことばの祭儀」が同祭儀の初司式となった久保助祭は前日、海路で種子島入り。「やはり緊張した」という大役を果たすために、奥さんと谷山教会の祈りの集いの仲間二人も応援団として同行してもらった。

ドイツでの感動を分ち合おう

WYD参加者がその実りを報告

今年八月にドイツで行われたワールドユースデーに参加した青年達を中心に、十月二十九日から三十日にかけて青年の集いが行われ、WYDでの感動を分かち合った。



大会の実りを熱心に報告する

今年八月にドイツで行われたワールドユースデーに参加した青年達を中心に、十月二十九日から三十日にかけて青年の集いが行われ、WYDでの感動を分かち合った。加し、鹿児島教区からも、個人での参加も含めて十数人が参加している。参加した青年の報告によれば、ホームステイや現地の教会との交流もあり、多くの青年が集う独特の雰囲気の中、交通混雑やさまざまなアクシデント、不自由もあったが、キリストの下に共に集う感動をさまざまとところで感じる役目を果たしていると言われている。

平和願って

ミカエル祭

笠利小教会

大笠利教会(内野洋平神父)の守護者は大天使聖ミカエルです。九月二十九日(木)の聖ミカエルの祝日を前に、九月二十五日(日)にミカエル祭を催しました。

当日は、小教会合同のミカエル祭のミサが、内野洋平神父と前主任司祭の浜田盛茂神父により午後五時からささげられました。その後六時半からは祝宴もありました。

大天使聖ミカエルは天では聖母マリアの守護の総帥として、地上ではカトリック守護の総帥としてあらゆる悪魔のはかりごとから

守る役目を果たしていると言われています。今の世は国内的にも悪が多く、世界的にも戦争が絶えず多くの悪がはびこっています。現代ほど世界の平和のために大天使の守護



を祈り求めなければならぬ時機はありません。笠利小教会で、小教会内の七つの教会の信徒がこの祝日を記念して祈りをささげたことは意義深いことでした。何事も新しくイベントを立ち上げることは大変なことですが、内野洋平神父をはじめ馬昌樹信徒会長を中心に企画推進された役員の方々に心から感謝いたします。



小宿教会にスロープ

このほど小宿教会入口に手摺りの付いたスロープが設置された。これは高齢化する信徒たちが教会に入りやすきしようと同教会壮年会(森山武久会長)らが手作りにしたものだ。十一月二十日に実施した教会バザーの益金を工事費に充て、壮年会員のタレントをフル活用しての完成となった。

クリスマスミサのご案内

教会	24日	25日	教会	24日	25日
出水	19時	9時	大笠利	19時	8時
阿久根	19時	9時	大熊	20時	*
川内	19時30分	9時	和光園	*	8時
入来	19時30分	10時	浦上	*	9時30分
大口	19時	9時	芦花部	*	18時
国分	19時30分	9時30分	聖心	20時	9時/19時
始良	20時	10時	古田町	20時	9時
吉野	20時	10時	西仲勝	20時	7時30分
玉里	20時	9時	喜界島	*	13時
ザビエル	20時/23時	10時	古仁屋	20時	9時
谷山	19時	10時	山間	18時	*
加世田	19時	10時	西阿室	*	15時
枕崎	*	14時	母間	19時	*
垂水	20時	10時	岡前	*	9時
鹿屋	19時	9時30分	沖永良部	19時30分	9時
星塚	*	8時	小宿	*	9時
根占	19時	9時30分	大棚	19時30分	*
溝辺	20時/0時	9時			
志布志	19時30分	10時			
種子島	20時	9時			

「WYDでもらった恵みを活かして多くの人に愛を伝えたい」などの感想があった。また他の青年からは「お互いを理解し合える友達やパートナーの存在はとても大切だ」等と活発な分ち合いが行われた。泉神父も「WYDは終わったが、私たちの巡礼の旅は終わらない。毎日が巡礼だ」と青年たちを励ました。

翌三十日午後にはザビエル教会で青年達を中心に信徒と司祭たち二十五人が集まり、WYDの報告会が行われた。会場にはその日の午前中から青年達が準備した大会写真や新聞の切り抜き、旗やバッジ、帽子など記念のグッズが展示され、また報告会では写真のスライドショーと共に参加者自身が感じたことの報告があった。報告を聞きに来た信徒からの「WYDに行つてから自分の中で変わったことは？」との質問に「いろいろな体験を通して、主イエスへの信頼が深まった」「教会の青年たちとのつながりをより感じるようになった」「人の愛情をより感じられるようになった。自分も愛を伝えていきたい」「自分の今の思いを形にしていける事が大切だと感じる」など、それぞれに大会の恵みを語った。報告を聞いた信徒の中には涙を流して感動する姿も見られ、糸永司教も「皆さんが大変な感動を覚えている事を嬉しく思う」と喜んだ。

報告会の後に行われたミサは、皆で手を握って祈りをささげるなど互いのつながりを感じられる工夫をして、温かな雰囲気だった。ミサの中で石田神父は「私たちは巡礼の旅でキリストに出会いその帰路にいる。一致の喜びやキリストとの出会いなどもらった恵みをそれぞれの場で活かし伝える事が私たちの使命」と話した。

今回の青年の集いは大会が終わってから間を置いて開かれたが、WYD参加者から「毎日の生活に追われてWYDでの熱意と感動が薄れつつあったかも知れない。また思い出させてもらった」と感想があったように、報告する側される側双方に素晴らしい感動を分かち合えるものになった。

私たちの小教区活動

和泊教会でフィリピンデー

私たち和泊小教区には、結婚して日本の家庭に入られたカトリックのフィリピン女性が、現在分かっているだけでも五十六人います。これは全信徒の半分近くに当たります。小教区では月一回、地元の信者と一緒に日本語、英語、タガログ語(聖書朗読のみ)を混ぜたミサがあります。ミサには参列するのは子ども大人あわせて二十人前後です。その時には英語の教会ニュースや教区報のタガログ語メッセージを配っています。また子どもの要理は毎週教会でしたり、自宅に出向いたり。通常の日曜ミサのためには送迎し、ミ

サ後に子どもたちの時間をとったり、また都合に合わせて午後学習会をしたり。また夏休みには一緒に学べるように、昨年からは泊二日の合宿もしています。要理を学ぶ子どもが増えるのは楽しみです。

主任司祭のメニヒ神父は、以前から年に一回でもこのフィリピン女性達が自分の国の母国語でミサやゆるしの秘跡、その他の指導を受けられるようにフィリピン出身の司祭を招く計画をしていましたが、この度「世界難民移住移動者の日」(九月二十五日)に実現させました。お招きしたのは種子島教会のベルナルディ

ノ神父。この日はメニヒ神父が種子島へ行き、司式者の交換となりました。教会ではこの「フィリピンデー」のために、前もって主任司祭とベルナルディ神父が書いた案内を配り、また教会から電話したり、彼女達同士でも連絡を取ってもらいました。ベルナルディノ神父は早めに沖永良部に来られ、私と一緒にフィリピン女性達の家庭を一軒一軒訪問しました。彼女達は表情豊かに会話し、笑い、怒り、泣き、そして祈りました。自分の国の言葉で話せる喜びは、言葉は分かりませんが、そばにいて私にも十分に感じられました。三千軒ほど訪問し、二十人に会えました。会えなかった家には名刺に一筆書いて置いてきました。

当日のタガログ語ミサには、訪問できなかった人や会えなかった人も何人か出席してくれました。参列してくれたのは大人二十人と子ども十八人、活気溢れる集まりとミサになりました。子供たちも親と一緒に祝福を受け、教会の希望は一層広がりました。

ミサ後は各自が持ち寄ったフィリピン料理で楽しいひとときを過ごしました。そして来年も同じようにフィリピンデーを開催しようと思いを散会しました。(報告/シスター荒木関)

「ゆらい・あいに参加して」

ザビエル教会 二宮敏子

「ゆらいあいに」六月十一日にこの会が発足して、はや五か月が過ぎました。

会は司教さまのごミサで始められる。その後の食事会は、その名の通り和やかな楽しい会である。

ゆらいとは「奄美の言葉で親しい人たちが集い、語り・互いに助け合う」と

「ゆらいあいに」六月十一日にこの会が発足して、はや五か月が過ぎました。

会は司教さまのごミサで始められる。その後の食事会は、その名の通り和やかな楽しい会である。

ゆらいとは「奄美の言葉で親しい人たちが集い、語り・互いに助け合う」と

「ゆらいあいに」六月十一日にこの会が発足して、はや五か月が過ぎました。

会は司教さまのごミサで始められる。その後の食事会は、その名の通り和やかな楽しい会である。

ゆらいとは「奄美の言葉で親しい人たちが集い、語り・互いに助け合う」と

文芸

俳句 (思川俳句会作品)

純心学園 田村鏡子

体育祭まぶしくみゆる競う子ら

体育祭がやく笑顔悔いはなし

(評)「まぶしくみゆる」もよく、「悔いはなし」は作者の笑顔である。

鹿児島 徳永ノブ子

小島見ゆ長崎鼻や鳥渡る

純心学園 山頭信子

どんぐりをポケットに入れロザリオ

す

つばぎの黄の花咲きて冬立ちぬ

出水 遠竹睦郎

月の弓星一つ従へ渡りをり

名瀬 松畑義弘

紫のあさがお笑う柿の枝

純心学園 川上 和

寒椿一枝手折りてかみにさす

阿久根 中津濱フサエ

沈みぬ

鹿児島 春山マリ子

眠る顔優しき老女秋の夢

鹿児島 本城 愛

薬や惜しむ棚田の穂波かな

(評)「ひこばえ」の穂波が浮かぶ句

鹿児島 龍門司真人

俎の窪みも恋し母の音

短歌 (思川短歌会作品)

阿久根 中津濱フサエ

寒き朝神の恵みをいただきて心清く

し朝餉にむかふ

(評)「心清くし朝餉にむかふ」がよく

い。

名瀬 林 明子

ラヴプレスはずしたくないアレギーあ

なたといっしょいっしょいっしょ

鹿児島 春山マリ子

人間の心は常に変わりゆく傷付き痛み暗く

しむ眼

鹿児島 田平新太郎

嘉例川の駅に集へる人波は古きを求め親

ひつそりと立つ秋の虹暫くは黒き日

傘をたたみて眺む

鹿児島 前田儀子

病む娘持つ末っ子悦子の面影が幼く

浮かぶ五十過ぎて

新春にこんな黒い鶏を描く悦子の

胸に涙が哭くのか

(評) 結句に愛の尊さを感じさせる佳

作

鹿児島 前田儀子

ひつそりと立つ秋の虹暫くは黒き日

傘をたたみて眺む

鹿児島 田平新太郎

嘉例川の駅に集へる人波は古きを求め親

しむ眼

鹿児島 前田儀子

病む娘持つ末っ子悦子の面影が幼く

浮かぶ五十過ぎて

新春にこんな黒い鶏を描く悦子の

胸に涙が哭くのか

(評) 結句に愛の尊さを感じさせる佳

作

鹿児島 前田儀子

ひつそりと立つ秋の虹暫くは黒き日

傘をたたみて眺む

鹿児島 田平新太郎

嘉例川の駅に集へる人波は古きを求め親

しむ眼

鹿児島 前田儀子

病む娘持つ末っ子悦子の面影が幼く

浮かぶ五十過ぎて

新春にこんな黒い鶏を描く悦子の

胸に涙が哭くのか

(評) 結句に愛の尊さを感じさせる佳

作

鹿児島 前田儀子

ひつそりと立つ秋の虹暫くは黒き日

傘をたたみて眺む

鹿児島 田平新太郎

嘉例川の駅に集へる人波は古きを求め親

しむ眼

鹿児島 前田儀子

病む娘持つ末っ子悦子の面影が幼く

浮かぶ五十過ぎて

新春にこんな黒い鶏を描く悦子の

胸に涙が哭くのか

(評) 結句に愛の尊さを感じさせる佳

作

鹿児島 前田儀子

ひつそりと立つ秋の虹暫くは黒き日

傘をたたみて眺む

鹿児島 田平新太郎

嘉例川の駅に集へる人波は古きを求め親

しむ眼

鹿児島 前田儀子

病む娘持つ末っ子悦子の面影が幼く

浮かぶ五十過ぎて

新春にこんな黒い鶏を描く悦子の

胸に涙が哭くのか

ザビエルさまの望みのままに!

ザビエルさまの散歩道

先日、鹿児島中央駅前
に大きなクリスマスツリ
ーが点灯されました。こ
の季節は他にもあちこち
で同様のツリーや装飾で
クリスマスムードを盛り
上げます。世間では待降
節なんか関係なく十一月
初めからこの調子です。

大天使ガブリエルが突
然現れ「救い主を身ごも
りますよ」と言われたマ
リア様はどんなにビック
リしたでし
よう!

でもすぐ
に「お言葉
どおりにな
りますように」と答えて
います。カナの婚禮の時
もマリア様はイエス様に
「まだその時ではない」と
と冷たくされるのに、
「あの人の言うとおりに
して」と。

神様と御子イエス様へ
の心からの従順と信頼の
なせる業です。

ザビエル様も神様への
心からの信頼を強く教え
ています。ザビエル様が、
自分は何もできない「も
っと苦しみが必要だ」と
祈りながら自分で自分を
鞭打つほどの謙虚さは、
神様への完全な信頼があ
るからなのでしょう。

十二月三日サンシヤン
島で一人凍えながら亡く
なったザビエル様は最後
まで「神様がいるから大
丈夫! 神様の望みのまま
に!」って思ってたんで
しょう。

ザビエル上陸記念祭実
行委員会から▼このコラ
ムでは皆さまのザビエル
神父様への想いや様々な
声をお待ちしています。
今後もお協力をお願い致
します。当コラムへの寄
稿は四百字以内で教区本
部・久保まで

「こんな自分でも神様が
使ってくださいるならどん
な困難も乗り越えられ
る」って!

十二月三日サンシヤン
島で一人凍えながら亡く
なったザビエル様は最後
まで「神様がいるから大
丈夫! 神様の望みのまま
に!」って思ってたんで
しょう。

ザビエル上陸記念祭実
行委員会から▼このコラ
ムでは皆さまのザビエル
神父様への想いや様々な
声をお待ちしています。
今後もお協力をお願い致
します。当コラムへの寄
稿は四百字以内で教区本
部・久保まで

戦後60年「声」特集

戦争体験と私の信仰

編集・発行 カトリック新聞社
A5判 104頁 300円 (税込)



この本は、カトリック新聞・戦後六十周年の特集号の「戦争体験と私の信仰」を小冊子にしたものです。多くの読者から、平和への訴えを一過性で終わらせろではなく、戦後六十年という節目の記録として、ぜひ単行本に残してほしいという要望におこたえするべく発行したものです。

平和を愛し、平和建設の使命をともしする多くの人々に、ぜひ読んでいただき、戦争を知らない若い人々に平和の尊さを伝える貴重な資料として生かしていただければと願っております。

ご注文はサンパウロ、女子パウロ会書店で承ります。
サンパウロ東京宣教センター TEL03-3357-8642
女子パウロ会通信販売部 TEL0463-34-1414

またロザリオの祈りの後、みんなで歌う時も皆童心に帰って楽しそうだ。鴨池教会の木原先生がハーモニカで伴奏してくださる唱歌の数々、どの歌にも若き日の思い出がある。皆無心で、何のてらいもなく美しいハーモニーを奏でていた。これもまさにゆらいあいだと思ふ。

美味しいおやつまで頂きながら私はふと思ふ。「こんなに至れり尽くせりで、本当にいいのよ」と。

この素晴らしい会が永久に続きますように。また会のスタッフの方々に感謝するのみである。神に感謝!



「へえ、日本の教会は今こうなんだ・・・」
ザビエル

カトリック新聞は、日本のカトリック教会唯一の週刊全国紙です。全国、海外の購読者様のお手元へ毎週直送いたします。
また、全国のサンパウロ・女子パウロ会書店でも販売しております。

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館5階 カトリック新聞社
TEL 03-5632-4432 FAX 03-5632-7030 Email kodoku@cwjpn.com

カトリック新聞
1部本体価格150円(税・送料別)
購読料金(前納、税・送料込)
半年4740円・1年9480円

見本紙贈呈いたします